

ロバート・ブラウニングの劇詩

「ドルーズ人の祖国への帰還」

三 谷 正

一 序

騎士団∧the Knights of Rhodes∧によって本国レバノン∧Lebanon∧から他郷に追放され、抑圧の生活に苦しむドルーズ∧the Druses∧民族中に民族解放を熱望する英雄デアバル∧Diabal∧が現われる。かれはその大業を果たすに当りドルーズ民族のインカネーション∧incarnation∧（顕神）信仰を利用し、自らを救世主∧Hakeem∧と宣言する。かれの恋人アナル∧Anael∧もデアバルと共に神性∧divinity∧を帯びて身の高揚を望む。しかしデアバルは救世主を宣言し神の化身を自称することに対し、良心の呵責に苦しみ事態が急進するにつれて、その宣言が自己を偽り民族を騙す卑劣な手段であることに気付き、その欺瞞を人民に告白し自らの苦悩を解消しようと決心する。恋人のアナルはその本心に於いては神憑りの神性のデアバルを愛しているのではなく、温い肉と血の通う人間的デアバルを愛している。しかし一方では矛盾した心情とは言え、かの女も亦ドルーズ人であるため、ドルーズ民族のインカネーション信仰から離れることができず、デアバルを救世主と確信し、恋人デアバルと共に自らも神性を得ようとする。ここにデアバルとアナルの男女が神性と人間性の問題をめぐって憂悶し、複雑な心理過程の結果、結局人間性が神性に勝つ。しかしその間に二人は互に運命に翻弄され、アナルは、愛するデアバルが救世主宣言を自己欺瞞であるとの告白をするに及び、かれを卑怯者となし、浅はかな判断から当局に告発してデアバルを罪に陥れる。しかもそれが自らの誤りと知るや悲しみのあまり即死し、デアバルも欺瞞の罪を勇士の恥辱となし、愛するアナルのあとを追って自殺し、いとも哀われな悲劇的結果に終るのである。この悲

ロバートブラウニングの劇詩「ドルーズ人の祖国への帰還」

劇は、劇として場面の变化に富み、人物の動きも頗る多彩で且つ活発であり、劇的局面的变化と生彩ある台詞の点からは相当な出来映えである。しかしわたくしが特に心打たれるのはドルーズ民族の情熱的郷愁従つて強烈な祖国愛であり、また主人公デアバルとアナルの深刻な恋従つてこれに伴う悲劇全篇に漲る哀愁的人間模様である。前者郷愁の情緒は単なる漂泊の心から来る浪漫的旅情の憂愁とは異なり、祖国を奪われ異境に追放された民族の悲痛な郷愁である。換言すれば被圧迫民族が民族解放を叫ぶ悲愁に溢れる強烈な祖国愛であり、またそのため絶大な指導者を要望し、救世主の出現というインカネーション信仰で表現される熱情的祖国愛である。またここに表現されるインカネーション信仰は単に迷信として片付けるにはあまりにも強い被圧迫民族の願望であり、熱情であり、一種の超自然力への憧れともみられる熱情的民族感情である。後者デアバルとアナルの愛はこの熱情的民族感情の中に織り込まれた若い男と女の熱烈な恋愛である。そのためその恋愛は苦惱そのものであり、激動するかれら民族社会の深刻な苦闘の縮図である。ここにわたくしはこれら民族的、個人的な苦患感情の燃焼を鑑賞し、この燃焼のうちに行動する登場人物の哀愁的人間模様を探ってみたいのである。

二 救世主を宣言する憂国の志士デアバルとドルーズ人の望郷の熱情

レバノンの騎士団はドルーズ人を地中海の小島に追放しながらも、かれらを懐柔しようとして総督を任命し、ドルーズ人の鎮静に躍起となる。しかしドルーズ人は総督の意に背き祖国レバノンへの帰還の機会を狙う。そこで総督はかれらの意図の阻止に暴君的な権力を振う。ドルーズ人の族長〈shikh〉はこれに屈せず抵抗する。そのため総督は族長を虐殺し、ドルーズ人の奴隸化を計る。これに対しかれは秘密結社を組織し益々反逆を繰返す。総督は抑圧を強化しドルーズ人を根こそぎにしようとする。やがて族長の遺児デアバルが父の復讐と祖国救済に立ち上る。かれは父族長が虐殺されたとき、幼少のため人に匿かくまわれて難を西欧に逃れ、成人し、民族解放と父の復讐の念に燃え、その目的遂行の手段として騎士団中のフランス人騎士ロイ〈Loyse〉と親交を結び、またヴェニス人を味方に引き入れて帰国する。かれは島に帰るや、曾て匿かくまってくれた人の娘アナルに恋をする。アナルは救国の熱情に燃え、祖国を救う意図のある男性以外は誰とも結婚しないと誓っている。デアバルは暴君的総督を屠ほり民族救済の大業の成就を謀るため、自らを救世主と宣言し、民族の宗教の創始者となり、且つ民族の治世の指導者となることを公言する。これを知った秘密結社の中心人物カ ril 〈Khalil〉は大いに喜び同志ラグヒブ〈Raghib〉に命じる。

「喜べ、ラゲヒブ、民衆に布告を出し、来り参ぜよと言え。老いも若きもすべての民に、永く秘めたるわれらの計画を公表せよ。囚われものが民衆を自由にし、踏み躪られたわが民衆を塵埃の大地より立ち上がらせろ。時は巡り来て、今、神性のデアバルの治世始まると告げよ。ヴェニス②のわれらを援け、夜の明けると共に、レバノンに向い船出すると伝えよ。而して叫べ『ドルーズの民よ、デアバルの求めに応じるヴェニス③のこよなき証言を聞け』と」

この布告を聞いて、今日、ドルーズの民衆が集って来たのである。夜は明けかかっている。同志カシュック〈Karshook〉が民衆に向って言う。

「月は紫紅色の炎の中に消え、夜は明けた。太陽よ、登り来て、汚れなく畏敬すべき神秘の救世主デアバルの上に栄光を破り出せ。われらの救世主デアバルは、昔モカタム山中〈Mokattam Jebel〉に姿消したるカリフ〈Khalif〉と異り、人間の姿そのまま、神の機能發揮し給うわが宗教の創始者なるぞ」と。

民衆は今や、デアバルをかれら民族の指導者かれらの宗教の創始者と仰ぎ、束縛の追放生活から脱出し、杉の木の下なる祖国レバノンへの帰還の希望に燃え、同志アユーブ〈Ayoub〉が、

「われらの祖国の山並よ、大いなる喜び汝なれにあれかし。汝の子等は汝なれに帰らん。われら今日より汝なれから離れたる追放者ならず。われらの苦境今日限り終りを告げん。われら、われらの後方に総督の死体を運び、われらの先手に永久の存在デアバルを仰ぎ、祖国レバノンへ勝利の歩を進めん」④

と叫ぶに及んで民衆の歓呼は絶頂に達する。⑤

三 デアバルの迷い

然るに事態がここまで進展して来た今日となってデアバルは迷うのである。この進展は救世主を宣言したかれの力ではなく、寧ろ有能なカリル初め秘密結社の同志の力である。かれの救世主の宣言は欺瞞であり、かれの行為は陰謀家のそれである。これ以上の事態の進展は、かれの欺瞞を暴露し、かれは陰謀家の譏りを受け、卑劣な人間と思われる。ここにかれの苦悩が生じ、これを脱するには欺瞞の仮面を捨てて逃亡するしか道はないと考える。しかし逃亡の前に自らの手で総督を殺し、父への復讐だけは実行せねばならぬと決心する。かれがかく考えていると

ロバートブラウニングの劇詩「ドルーズ人の祖国への帰還」

き、カリルが入って来る。カリルはデアバルに、総督及び教皇の使節或はヴェニス^⑥の提督が島に向っていることを報告する。これを聞いたデアバルは、その心に迷いが生じ、逃亡の決意が鈍る。しかし先づ、自らの欺瞞の姿を民衆に告白することの是非をカリルによって見極めようとしカリルに問うのであった。カリルがドルーズ民族解放の意図と能力を十分に備えながら何故それを自ら実行しないかと。カリルはかれのいかなる訴えもドルーズ人を奮起させることはできない、ただ民衆の救世主デアバルへの信頼のみが救国の大業を果たし得ると答える。カリルの答えによってデアバルは欺瞞告白の困難を知る。そこへアナルが登場する。デアバルはかの女へだけは是非とも自らの真実の姿を明かさねばならぬと考える。アナルはデアバルが幼少の頃、かれを隠し救った人の娘であり、カリルの妹である。且つはかの女が民族を救う意図のある男性以外は誰とも結婚しないと誓っていた女性でもある。故にアナルが救国の意図を持つデアバルと結婚する気になったのは自然の成り行きであった。しかしかの女はデアバルを救国の志士として尊敬はするものの、神としての畏敬の念を感じられず言うのである。「あなたに跪くこと^⑦できないのは何故でしょうか。わたくしの心の真実を言ひませう。わたくしにはあなたは決して神とは思えないのです。と申しますのはあなたの手は人間の手、目も人間の目、声も人間の声ですもの」と。かの女の愛は神性のデアバルへのものでなく、人間デアバルへの愛であった。これを聞いたデアバルの心は微妙に動き、かの女へは自らの欺瞞を是非告白せねばならぬと強く決心する。しかしかの女は、一方では、ドルーズ人としてインカネーション信仰を持ち、かれが神になるときの近づくことも確信している。従ってかの女はかれの神性を認め、神性のデアバルの花嫁となつて自らも神性に高められることを内心望んでいる。やがてデアバルが去り、代つてロイが現われる。かの女にとって意外なことは、ロイがかの女に恋を打ち明けたのである。かの女はロイの言葉に狼狽する。けれども総督の手からドルーズ民族を解放する人でない限り結婚はしないとロイに断言し、ロイのその場から去ることを強く求める。ところがロイは自らこそかの女の言う救国の士であると言う。そして熱烈な求愛の言葉を残してその場を去って行く。そこへ再びデアバルが現われる。アナルはデアバルを見た途端、俄かにデアバルに対する愛の情熱が沸き、矢庭にかれに近づき、かの女を抱擁せんことを迫る。デアバルはあまりの熱情に圧倒され一瞬ひるむ。しかし優しく宥めてやる。かの女は我に帰る。けれどもデアバルは自らの真の姿をかの女に見せねばならぬことを益々痛感する。そのときカリルが現われる。

四 アナルの総督刺殺とかの女のインカネーション信仰

カイルが現われたため、デアバルはアナルに自らの真実の姿を話す機会を失う。しかし心中既に自らの手によって総督を殺す決心をする。⑩

「総督を殺しさえすればよい。万事はこれで終る。取った手段の是非を詮索するのは明日のこと。手段は卑劣であるかもしれないが、復讐という目的には充分忠実な手段と言えよう」と。かれは剣を掲げて総督を待つ。足音が聞える。かれは壁掛をさっと開ける。すると豈凶んや、アナルが現われる。「おや、アナルか、僕のアナルか。そなたはラップの音が聞えないのか。僕はここで総督をやっつけ、万事を破滅させるんだ。どうしたんだアナル。口もきかぬのか。総督がやって来た」とかれは息吐きききつて言う。アナルはデアバルの「総督がやって来た」の言葉を、かの女の殺した総督の死体が動いて来たと思ひ金切声を出してじっと立っている。するとデアバルは「そんなに、ぼんやり見上げているときじゃない。一瞬にやっつけねばならぬ。この仕事は、そなたがここには邪魔になる。僕は全くの冒険をやるんだから」と言い、ふとかの女の髪を見て、「そなたの髪は素敵だな、そなたはいつもこのように美しい。だが今はそなたの髪を見てはおられん。僕は彼奴をやっつけねばならぬ」と言う。するとアナルが突然「わたくしが短刀で総督を殺しました」と言う。デアバルは吃驚しかの女を見る。かの女の短剣に血が滴っている。デアバルは「アナル、そなたが彼奴を殺して血まみれにしたって？」と唾然として二の句がつけない。そのときアナルは言う。

「デアバル、あなたが総督を殺されたのです。それは間違いありません。わたくしが殺したと言いたい希望は一度は持ちました。でもわたくしはあなたの花嫁に相応しい女になりたかったのです。それで是非申さねばなりません。かれを殺したのは、わたくしではなく、あなたが自身です。決してわたくしではありません。デアバル」と。更に

「わたくしは血で汚れていますけれど、わたくしに話をして下さい。わたくしが話す間わたくしを抱いて下さい。あなたの心の命令がわたくしの心に伝わったとき、わたくしは熱情に導かれ、あなたを口にしながらかれを殺しに参りました。そして近づく歓喜がわたくしに叫ばせたのです。『愛する人のために犠牲になれ』と。そのとき目の前に総督がいました。わたくしが近づいたとき、あなたの情熱の炎が音楽を伴ってわたくしの頭に突入しました。それはあなたの言われた通り一瞬の仕事でした。間違いなくそうでした。ですからあなたが殺されたのです」と。かの女は更に情熱的に言う。

「これはかれの血です。そしてまだあります。これもそうです。デアバル、わたくしを抱き上げて下さい。躊躇しないで、さあ。あなたの栄光を耀かせて下さい。あなた自身とわたくしを神性を帯びたものに変えて下さい。きつとですよ。皆の者がわたくし共の処に集るまでに。少くと

もわたくしを確実にあなたのものにして下さい。デアバル、あそこに血が迸っています。でも総督は暴君でした。かれが遂に眠るように倒れるのをわたくしは見ました。眠るようにと申しましたね。そうです。でなければ人は死をどうして眠りというのですか。眠るようにと今申しましたが、いやそうではありません。かれは眠るようではなく、かれの胸の上にまがるように倒れたのです。こんな死に方をさせたのはわたくしの罪と思います。わたくしを罰して下さい。デアバル。しかしあなたは、かれにわたくしを罰せしめますか。罰するのはあなたであつて、かれではありません。かれはかれの血に染った胸の上に腹這っています。かれはここに子供のようになんか呻きをしています。かれはもうこれでよいのです。では、かれに新しい生命をあたえてやって下さい。それはもう早やすぎもしませんし、不思議でも何でもありません。さあ、わたくし共を神に変えて下さい」^②

と、デアバルに二人の神性を宣言することを迫る。然るにデアバルは突然^{ひざまず}跪いて言う。「このように僕の変わったのを見てくれ。そなたは気高く振舞った。ところがこの僕は」^③と。アナルは啞然として言う。「救世主が跪いたりなさいますの」^④と。デアバルはかれの欺瞞がこの結果を招いたという思いに打ち負かされ「救世主なんかではない。ただのつまらぬデアバルなんだ。僕は欺瞞の振舞をしてきた。その結果がこれなんだ。軽蔑が僕をめちゃくちゃにする前に僕の言うことを聞いてくれ」^⑤と言って今迄かれは人をも自らをも偽って救世主と豪語し、奇跡なくしては民族解放の仕事は成就できないと言ったことの虚偽であることを告白する。するとアナルは、

「わたくしが夢に見つづけたのは総督刺殺のことばかりでした。誰があなたが救世主でないと申しましたか。あなたの身の周りに起る奇蹟、あなたの燃える情熱を誰が疑いましたか。ああ、あなたはわたくしを試めそうとなさっている。試めされても矢張りあなたの救世主であること^⑥を信じています」

と言う。デアバルは「ああ、わが民族が西欧的伝説インカネーションの欺瞞に引掛かるとは。他民族の卑しい群集でさえ影響をうけない奇蹟が、哀われにもわが民族の最善の人達を征服するとは」^⑦と歎く。するとアナルは、

「デアバル、ここには欺瞞なんかあるはずがありません。そうです。デアバル、あなたは嘗てはただの人間でした。でも今は違います。現在ただの人間なのはマーニ^⑧Mani^⑨です。カ ril もそうです。ロイさえもただの人間です。かれらの声はわたくしの耳につきまといまふ。かれらの目もわたくしを追求してやみません。あなたがこんなにわたくしを試めされるのはあなたの恥です。いやわたくしが試めされる必要のあ

る人間であることはわたくしの恥です。わたくしはあそこで総督を血まみれにし、ここであなただけに会っているではありませんか。わたくしは総督のべとべととした血で全身蔽われていましてもあなたの首に縋りつきます。わたくしは総督を殺してもあなたによって救われたと言つて下さい。デアバル、わたくしは救われたと言つて下さい」^⑧

と情熱的にデアバルに縋りつく。デアバルは大いに驚くがかの女の手を解きかの女を離す。

五 アナルのデアバル告発と裁きの場のデアバル

かの女の燃える情熱に対しデアバルのあまりに反応のない、あまりに頼りないかれの態度に、突如としてアナルの情熱は去り、浅はかな判断が頭を襲い、かれを卑しい男、欺瞞の男、陰謀家と思ひ込み、極端に冷酷な態度へと豹変し、

「救世主はわたくしを救う気持はありませんの。そうですか。ではあなたはただのデアバルです。うずくまって、土に礼をするなんて、あなたは何とも言いようのない卑しい人です。あなたのような人は、みんな重ね重ねに積み上げて、踏みつけ踏みつけ、雲の上へとわたくしは登つて行きます」^⑨

と憤然として悪態的言辞を弄し、激しく食って掛かり、今は一刻も早く欺瞞を民衆の前に告白すべきであると迫る。この厳しいかの女の言葉は、今度はかれの心に突如として、民族解放の情熱を再び掻き立て次のようにかれの救世主の自信を恢復させるのであった。

「僕は決して民衆の前では告白しない。そなたは僕にこれ以上の恥をかけたのか。それは何故だ。そなたはこのたびのそなたの行為を僕の行為だと言つたじゃないか。その通り僕の行為だ。それ故、僕はそれに伴う結果は僕が甘受する。僕にはまだ運命と戦う意志がある。過去は過去だ。僕の偽りの生活は今後それが真実となるのだ。僕が今言うことを聞け。大船団が今にこの島に到着する。それはわれわれを美しい風光と麗かな空のわれらの祖国レバノンへ運んでくれる。僕とそなたは共にレバノンで君臨できるのだ。われらの秘密をこのままにしておく。ドルーズ民衆が僕を救世主と信じることによって、かれらに新しい生活をさせることができるんだ。僕はヨーロッパで知つた。人類を幸福に導いた偉大な聖者はこのようにして人類に畏敬されたのだ。われら二人はかれらの神となることができる。現に今もそうなんだ。この世の偉大な事業のすべては偉大な計画の破滅から生れるのだ。この浮世ではいつもそうなんだ。人はバベル（Babel）の都を建設することがで

きるんだ。僕はそなたの手からその剣を取ろう。総督を殺したそなたの行為を僕の行為としたい。さあ、行け。僕の指環を持って行け。そしてヴェニス②の軍勢が上陸するまで、教皇の使節に近づく者どもを阻止するんだ」③

と。然るにこれを聞いたアナルは「ではまだ救世主を装いつづけるつもりなの」と折角自信を回復したデアバルにぶっきら棒に言うのであった。デアバルは救世主の三重冠「Tara」を頭に置きながら「今まで眩くらむことをしなかったこの僕の眼を大きく開けるこの瞬間から僕の真の統治が始まる。僕は僕自身を知り、僕の役割をいかに演ずべきかがわかった。そなたは口もきいてくれないのか」と無然として言う。アナルは無言のまま、その場を去り教皇の使節に告発するのであった。デアバルはアナルによって告発されていることを知らずに部屋の外の人々の騒ぐ声を耳にするや「あの騒ぎはカ ril とドルーズの民衆の声に違いない。ヴェニスの軍勢が近づいたからなのだ。おれはかく剣を握っているぞ。ドルーズの民よ。君達を救うのは救世主のおれだよ。部屋に入り総督の死にざまを見ろよ」と独り言を言う。その途端にロイが入って来る。デアバルは剣を衣服の中に隠す。ロイは「総督はもうえらい奴じゃない。全くの無力な奴となったのだ。言わば死んだも同然だ。奴は総督じゃない。総督は君だよ」と告げ、名目上はロイが総督に任命されたのではあるが、実質的にはデアバルが総督であることを説明する。そしてロイは次のようなことを付け加えるのであった。かれはアナルを愛し、アナルもかれを愛しているから、騎士をやめてドルーズ人となり、ドルーズ人の間に生活したいと。この意外な言葉にデアバルは愕然とする。そのとき使節の衛兵達が入って来る。それは総督刺殺の下手人を捜しに来たのであった。衛兵達はデアバルを指さし「彼奴を捕えよ。彼奴を縛り上げろ。総督を殺したのは彼奴だ」と叫ぶ。この叫びを聞いたロイは「たわけ者め、一体貴様等は何をしようとしているんだ。この方かたはおれの親友デアバルだぞ。手を離せ。事情を言え」と言う。衛兵は「今、あなたさまが庇かばっておいでの方が総督を殺したのです」と答える。ロイは「総督が殺されたと？ たわけ者め、デアバルがどうしてそんなことをするものか」と鋭い語調で叱責する。そのとき衛兵の一人がデアバルの衣服をたくり上げる。デアバルは剣を投げ出す。ロイは衛兵達に「あとへひけ。かれはおれの友だ。友以上の御仁じゃ。お前達がおれの友を怒らせて総督を殺させたんだろう」と言う。衛兵は言う。

「いえ、違います。怒らせなんかしません。それは永い間の陰謀なんです。ドルーズ族全部の共謀なんです。かれはかれらのカリフ「Khalif」
(教主兼国王)です。それは見世掛けにすぎませんが、ずっと昔に死んだ偉大なカリフが今甦り、かれらの前に現われたと言っているのです。

すべてはかれの共犯者の一人によって暴露されたんです。その者は総督刺殺の恐怖に打たれ使節に知らせたのです。その内報者の言った通り

に、ここでこのデアバルを見つけ捕えるところなんです」と。するとデアバルは

「どいつがおれを裏切ったのか、言え」と語勢をあげて言う。ロイは「そうだ。君は衛兵の言い分を聞いたから、今度は君が君の言い分を言う番だ。君が言い終るまで、此奴等を君に近づけはしない。僕は此奴等を抑えておくことができなければ僕は君と共に死ぬまでだ。此奴等の話を打ち消せ。君が偽りのカリフなんかであるものか」と憤慨する。しかしデアバルは言う。「ロイ君。僕は、今、君が聞いた通りの人間なんだ。すべて真実だ。もう隠しはしない。この者どもが君に言った通り、すべては永い間計画されたことなんだ。われわれドルーズ人はこの一握りの奴等押し潰すだけの大勢の人間が揃っている。ヴェニス軍勢も今にわれわれを援けに来てくれるのだ」と。ロイはどちらの言い分が正しいのかわからなくなって言う。

「今、僕は親友カリルに会ったところなんだが、かれはそんなことを僕に一言も言わなかった。僕の愛するアナル、僕を愛するアナル、かの女もそのようなことを一言も言わなかった」と。ロイが親友カリルとか、愛するアナルなどの言葉を口にしたのに驚いたデアバルは、

「君を愛するアナルって？カリルが君の親友だって？カリルが君を尊敬しているって？かれは僕の片腕だ。かれは僕が権限を任している男なんだ。アナルが君の愛を受け入れただって？かの女は僕の花嫁だぞ」

と真剣そのもの様子でロイに迫る。ロイも吃驚して、

「君の花嫁って？共犯者の一人だとかいのかい」

と。デアバルは一層の真剣な表情で、

「間違いなく僕の花嫁だ」

と言い切るのである。するとロイは、

「あの輝かしい眼を持つかの女が、あの眼を持ちながら総督刺殺に関係しているとかいのかい」

と意外の面持をする。そのとき外からドルーズ民衆の怒号が聞えてくる。今度はデアバルがロイに自分の傍を離れないようにと注意する。やがて使節の他の衛兵が入って来て言う。

「ロイ殿、かれ(デアバルのこと)と共に逃げなさい。それが最も安全です。ただかれの傍にあってのみ逃げることはできません。ドルーズ全民衆

ロバートブラウニングの劇詩「ドルーズ人の祖国への帰還」

が暴動化しています。かれらは邸の周囲に集合しています。今にここにやって来ます。あなたのところにやって来ます。かれらに抵抗できる衛兵は僅か二十名です。一人のドルーズ人、唯一人の忠実なドルーズ人が使節に知らせなかったら、われら使節の一行は何も知らぬうちに皆殺されたかもしれません。お逃げなさい。使節も吃驚びくつくされています。ああ、救世主、お怒りにならないで、われらだけは逃がして下さい。われらはドルーズ人の迫害を受けることは何もしていません。ロイ殿、かれの傍にいて下さい。民衆はかれを救世主と歎呼しています。かれらの昔死んだカリフが帰って来たと呼んでいます。かれはかれらの神であって、生も死もかれの意のままだと絶叫しています⁵⁰」

と。ロイはデアバルの傍を離れない。ドルーズの民衆が騒然として部屋に入ってくる。かれらは、救世主が現われ、総督は殺された、レバノンに帰えられると口々に話し合い騒いでいる。そこへ使節が入ってくる。かれは表面冷静を装い、民衆に説教じみたことを言い、デアバルの奇蹟の根拠のないことを口にして、ドルーズの信仰の動揺とデアバルの権威失墜を計る、デアバルの怒りは大爆発する。そのときカリルが同志と共に登場する⁵¹。カリルは今、総督の刺殺されたこと、また使節がその下手人をデアバルとし、デアバルを陰謀家としての裁きをしていることを知ったのである。救世主デアバルを裁くなどともないことだとカリルは激怒する。デアバルとカリルを信頼している民衆は二人の周りに集る。そのとき使節への密告者が証言のため顔にヴェールをして登場する。怒れるカリルはそのヴェールを破る。アナルの顔が現われる。告発者がアナルであることをデアバルは知る。ロイは告発者がアナルであることを知ると、かの女は陰謀に加担していないと思ひ、喜びの感情を顔にあらわしかの女に近づく。次いでかれはデアバルの弁護に必死となる。デアバルは冷静を取り戻し、剣を捨て、かれの陰謀及び救世主を名乗った欺瞞を認める。しかしかれは告発者アナルに証言を迫る。かの女はそれをする事ができない。今やかの女は理性を取り戻し、目の当りにデアバルを眺めた途端、かれが卑しい欺瞞の男、腑甲斐ない憶病者とは決して思われず、かの女の熱愛するデアバル、男性的志士のデアバル、一生を捧げるべきかの女の理想の恋人デアバルを再発見し、かれへの慕情がひしひしとかの女の胸に迫るのであった。

六 神性に勝つ人間デアバル

デアバルはアナルに向って言うのであった。

「僕が裏切ったというのか。それはそれでよい。僕はそれに相応しい人間だ。僕はそなたの告発に従うよ。そなたのしたことは大して悪いこと

ではない。だが僕の一生はこれで終りだ。杉の木も僕達にはもう揺れてはくれまい。そなたのしたことは罪であったからだ。また僕も刑罰を受けなければならぬ。運命と諦めよう。そなたに魅きつけられ、そなたによって死ぬ。死んでも僕は後悔しない。僕は僕のアラブ的本能を持ちながら、僕のヨーロッパ的侵略に妨害され、また、僕のヨーロッパ的頭脳を持ちながら、僕のアラブ的感情に妨害された。この二つが釣合っているとき、僕は何の生き甲斐もない生活をした。どちらかが優勢になったとき、即ちヨーロッパ的計画者か、或はアラブ的神秘主義者かのどちらかが優勢になったとき、僕は何か生き甲斐を感じた。今はどちらか一方が他方をぶちこわしてしまった。見ろよ。両者の衝突から第三のよりよきものが生れた。即ち単なる人間性が生れたのだ。僕はこれに従う。僕はそなたを愛する。以前はそなたを真に愛していなかった。以前の愛は愛に見えたが、真の愛ではなかった。そなたが僕を崇めている限り、どうして僕はそなたを愛し得ようか。今、そなたは僕を軽蔑している。そしてそなたは計り知れないほど遙か僕の上にある。他の人でなく、そなた自身が僕に死の宣告を与えた。僕の剣がそなたの判決を執行するのだ。しかしその剣にはそなたの手を感じる。僕の崇むべき、服従すべき宝なるそなたを超えて、僕はそなたによって死の谷間へと歩むべく運命づけられている」⁵³

と。デアバルの凜然たる姿を見、凜々たる声を耳にしたアナルは人間デアバルに対する情熱的愛が頓に甦り、使節への密告を悔い、その救いを痛切に求めるかの如く、かれの神性を示す名「ハキーム」⁵⁴によってかれに叫び、かれの足下にどっと倒れて死ぬ。デアバルはかの女の死体の上に身を屈めて言うのであった。

「最後の言葉を言わう。僕は今日そなたを高めることを夢みていた。それは無駄な夢だった。いや、そうじゃない。そなたはより偉大な高揚を得たのである。そなたに口づけする以外に、僕自身を高める何が残っていよう。僕はこうして僕自身を高める。そして僕の魂を自由にするんだ」⁵⁵

と。遂にデアバルの人間性が勝利を得たのである。人間性が神性を征服したのである。かれは親友ロイにドルーズ民族の将来を託する言葉を発し、またドルーズ民族の幸福を祈り、忠実なアナルの死体をつくづく眺めた途端どつとその場に倒れる。ドルーズの人々は皆デアバルを拜む。使節の権威は失墜し、ヴェニススの援軍のラツパが響き渡る。民衆は「デアバル御身を高揚されんことを」と叫ぶ。デアバルはアナルの傍に倒れたまま、微かな声で民衆をロイの保護下に置き、カリルの指導の下にレバノンに帰ることを民衆に命じ、最後にアナルの死体に向って、

ロバートブラウニングの劇詩「ドルーズ人の祖国への帰還」

「ドルーズ人はレバノンの山にあるぞ」⁷⁷

と渾身の力をこめて叫び、アナルの上に折り重って息を引き取るのである。

七 結 び

この劇は事実についてのものではなく、ブラウニングの想像の産物である。即ちドルーズ人の神蹟現の信仰に基づき、人物、事件、表現をブラウニング自身が情熱的想像を恣まじまににして、浪漫的、抒情的、東洋的に描いたものである。主人公デアバルは、一見、民族を騙し、自らを偽る欺瞞家と思えるが、民族信仰のハキーム△Hakeem△（救世主）即ち所謂メシア△Messiah△（救世主）として民衆の前に出現したにすぎなく、全くの陰謀家ではなかった。かれの唯一の目的はドルーズ民族をその束縛から解放し、祖国レバノンへ帰還することであった。この目的達成のため、ドルーズ人の自らに対する信頼を強化して、栄光のうちに祖国に帰ろうとして救世主を宣言し、民族の救済者を僭称したにすぎなかった。元来が誠実な人間であったが故に、かれの理性と良心がその僭称を許さなくなり、恋人アナルに自らの欺瞞を告白し、身を滅すに到るも、かれの民族救済の目的はドルーズ民族の記憶に生きて残されたのである⁷⁸。しかし幼にして父が虐殺され、苦難のうちに生長し、アナルに恋するも、そのアナルによって死への道を歩まざるを得なかったその生涯は悲劇の主人公に相応しいものであった。アナルはブラウニングの多くの詩の中で最も行動的な非凡な女性である。救国への執念と恋するデアバルへの愛のために、女性ながらも総督を自らに刺殺するその姿は東洋的武人の娘の典型である。一方、かの女はドルーズ人なるが故に、インカネーション信仰からデアバルの救世主なるを信じ、自らも共に神性を得んことを切望したのではあったが、デアバルが救世主でなく、ただの人間であることを告白するや、突然軽蔑的態度に交じ、剩あまつまえ恋人たるデアバルを告発し、自ら証人としてデアバルの前に立つも、デアバルの凜々たる態度を見るや「ハキーム」と叫びかれの足下に倒れるところはあまりにも人間的であり、あまりにも弱い人間女性の激情そのものである。デアバルとアナルが共に求めたものはドルーズ民族の祖国帰還であった。そして両者ともこの目的に向けて一路邁進する善意の人間でありながら、神性と人間性をめぐってそれぞれが苦悩し、最後の瞬間に両者とも人間性に目覚めるものの、共に死に追いつめられるというのは、運命のいたずらとは言えあまりにも痛ましい人間悲劇である。この重苦しい悲劇の中にあって一抹の清涼剤とも言うべきものが、アナルに恋するロイとデアバルの片腕カリルの存在である。ロイは淡泊にして快活な若いブレ

ートン生れの騎士である。その明敏にして寛大な心と騎士らしい率直性から抑圧されたドルーズ民族に同情し、ドルーズ族の娘アナルに片思いながらも熱い恋をするところはこの劇に陽気と明朗を与えてくれるのである。竹を割ったような、すっきりとした誠実なカリルの存在も光っている。カリルによって、ロイの援助の下にドルーズ民族が祖国に帰還し、欺瞞に見えた救世主デアバルの奇蹟が、結局に於いて、実現されるところに、われわれは悲劇の重苦しさから救われるのである。この二人の人物を挿入して、哀愁一色にて、喜びの情緒の乏しいこの悲劇に、われわれの息抜きをするブラウニングの技巧は悲劇作者としてのかれの腕の冴えを示すものではないか。コーエン(J. M. Cohen)がこの劇を評して、東洋的背景を以って、最も奔放な情熱的な愛を自己犠牲の極限にまで高揚したブラウニングの野心作と言っているのが首肯けるわけである。またチェスタートン(G. K. Chesterton)が、絶妙な文学的姿のうちにブラウニングの典型的な資質を示す素晴らしい劇であると言っているのも極めて適切な批評と考えられる。^⑤

〔I〕註

- ① アナルの兄で、デアバルの片腕
- ② Robert Browning : The Return of the Druses, Act I, II, 228—236
- ③ *ibid.*, II, 1—8
- ④ *ibid.*, II, 11—16
- ⑤ この日、総督は騎士団本部へと旅に出て邸を留守にしている。秘密結社の同志は留守に乘じ邸を占領し、分捕品をめぐって口論し、また総督の残忍と淫欲を非難し、邸を荒し廻る。カリルは、結社の同志にふさわしい慎重と威厳のある行動を命じる。高潔なカリルの説得は同志のよからぬ行動を抑える。同志は各自の部署につく。伝令の一人が、総督の帰国とロイの同行を報じる。カリルはロイの同行に驚く。ロイはデアバルの親友であり、騎士団中唯一人のドルーズ人の味方であり、今日の計画にあたり、ロイの身の安全のため、島の外に送り出した人であったからである。第二の伝令がローマ教皇の使節の来ることを報じる。第三の伝令がヴェニス船の到着寸前なることを報じる。カリルは喜び、計画の完成の近きを告げる。そこへロイが現われる。ロイは突然皆の静まり、喜びのを感じる。それは註⑥の示すようにロイの総督に任命され情報を知ったためと思う。やがて皆の者はまだ知らぬことに気付く。しかしかれらが一異国人であるロイに、どこか家庭的な温い雰囲気を迎える不思議を覚え、デアバルとの日頃の話し、即ちロイの先祖がレバノンと同盟の誼みを結んでいた話を思い出し、愉快な気分になる。ここまではデアバルの計画は成功したのであった。

⑥ Robert Browning : The Return of the Druses, Act II, II, 256—261

ロバートブラウニングの劇詩「ドルーズ人の祖国への帰還」

ロバートブラウニングの劇詩「ドルーズ人の祖国への帰還」

- ⑦ ロイは註⑥が示すように残酷な総督を免職させ、代って自らが総督に任命されたことはかの女の言う救国の志士であると思っている。
- ⑧ カリルは総督の近づいたこと、いつでも一撃を加える準備のできていることをチャバルに報告する。
- ⑨ チャバルは自らが平凡なただの人間でありながら、インカネーション信仰に乗じて救世主を宣言し、秘密結社の同志を傘下に集め、かれらをして総督を刺殺せしめ、自らは勞せずして民族解放の指導者たらしんとすることは全く欺瞞行為であると意識し、かれらの手を借らずに独力で総督を殺し、せめて父の復讐だけはしよつと決心したのである。
- ⑩ Robert Browning : *The Return of the Druses Act IV, II, 1—5*
- ⑪ その瞬間かれは心のうちでつぶやくのであった。「右の手で壁掛を開くべきか。左の手で開くべきか。それとも両手で開くべきか。どっちにしたらって首から心臓までまっ二つに刺し殺すんだ。彼奴はその場に倒れるだろう。おや、彼奴が来るぞ。近づくな。足音がする。今だ」と。Robert Browning : *The Return of the Druses, Act IV, II, 17—18*
- ⑫ *ibid.*, II, 20—23
- ⑬ Arthur Symons も次のように言っている。“There is drama in this stage direction. With this involuntary scream (and the shudder and start aside one imagines, to see if the dead man really is coming) a great actress might thrill the audience.” Arthur Symons : *An Introduction to the Study of Browning*, p. 68
- ⑭ Robert Browning : *The Return of the Druses, Act IV, II, 23—26*
- ⑮ 命がけの大事をなす寸前すら恋する女の美しさにとれる男心を描いて妙である。
- ⑯ Robert Browning : *The Return of the Druses, Act IV, II, 27—28*
- ⑰ *ibid.*, I, 29
- ⑱ *ibid.*, I, 29
- ⑲ *ibid.*, II, 29—33
- ⑳ *ibid.*, II, 33—42
- ㉑ *ibid.*, II, 44—56
- ㉒ *ibid.*, II, 56—57
- ㉓ *ibid.*, I, 58
- ㉔ *ibid.*, II, 58—60
- ㉕ *ibid.*, II, 74—77
- ㉖ *ibid.*, II, 78—84
- ㉗ 秘密結社の同志の一人

- 28 Robert Browning : The Return of the Druses, Act IV, II, 85—94
- 29 *ibid.*, II, 95—97
- 30 *ibid.*, II, 115—134
- 31 *ibid.*, I, 134
- 32 *ibid.*, II, 135—138
- 33 アナルはチャバルが尙も欺瞞をつづけ公衆の前で告白する意志のないのを見て、臆病者、卑怯者との浅はかな判断が益々募り、ただ一途に騙されたとの感情のみが胸に込み上げ、理性を全く失い、チャバルを民族の裏切者と決め、腹立ちまぎれに教皇の使節に告発するのであった。
- 34 Robert Browning : The Return of the Druses : Act IV, II, 148—151
- 35 *ibid.*, II, 155—157
- 36 ロイはかねてチャバルとの交際の結果、チャバルの心のうちを察し、騎士に相応しい行動として、騎士団の総会の席で総督の悪政を非難し、総督自らにもそれを認めさせ、結局、総督を免職に追い込んだことを説明する。
- 37 Robert Browning : The Return of the Druses : Act IV, I, 194
- 38 *ibid.*, II, 193—194
- 39 *ibid.*, II, 196—197
- 40 *ibid.*, I, 198
- 41 *ibid.*, II, 200—202
- 42 *ibid.*, II, 202—212
- 43 *ibid.*, I, 212
- 44 *ibid.*, II, 213—215
- 45 *ibid.*, II, 219—223
- 46 *ibid.*, II, 230—233
- 47 *ibid.*, II, 234—248
- 48 *ibid.*, I, 249
- 49 *ibid.*, II, 250—251
- 50 *ibid.*, II, 269—283
- 51
- 52 カリルは落ちついた表情で言う「ヴェニスへの援助は間近である。かれらの船隊は既に入港した。チャバルはもう総督を殺したか。チャバルはもう神に変わったロバートブラウニングの劇詩「ドルーズ人の祖国への帰還」

ロバートブラウニングの劇詩「ドルース人の祖国への帰還」

か」(Act V, II. 89—91) これを聞いた間抜けの使節は「ヴェニスの援助とな。何のことかい。この若者は誰なんだい」(Act V, II. 92—93) と問う。使節の従者が小聲で言う。「カレルとか言う男で、チャベルの共犯者です。ロイ殿が今言われたところでは、チャベル以外の唯一人の恐るべきドルース人だそつです」云。 (Act V, II. 93—94)

㉔ Robert Browning : The Return of the Druses, Act V, II. 263—288

㉕ *ibid.*, I. 293

㉖ *ibid.*, II. 386—391

㉗ *ibid.*, I. 366

㉘ *ibid.*, I. 393

㉙ 註㉔が示すようにエジプトのカリフ第六世即ちかれらの宗教の創始者ハキーム・ビーム・アラフ(Hakeem Biamr Allah)が神秘のうちに姿を消したがやがて栄光に輝いて、ドルース人の前に顕現する民族信仰

㉚ Edward Dowden : The Life of Robert Browning, p. 69, II. 7—13の次の言葉参照

“Religions and chivalric enthusiasm are blended with the enthusiasm of the passion of love.”

㉛ G. K. Chesterton : Browning, p. 51, II. 7—13の次の文参照

We have in ‘The Return of the Druses’ his love of the corners of history, his interest in the religious mind of the East, with its almost terrifying sense of being in the hand of heaven, his love of colour and verbal luxury, of gold and green and purple, which made some think he must be an Oriental himself.”

㉜ *ibid.*, p. 51 II. 22—27参照

“Djabal, the great Oriental imposter, who is the central character of the play, is a peculiarly subtle character, a compound of blasphemous and lying assumptions of Godhead with genuine and stirring patriotic and personal feelings : he is a blend, so to speak, of a base divinity and of a noble humanity.”

㉝ J. M. Cohen : Robert Browning, p. 22, II. 4—8の次の文参照

“ ‘The Return of the Druses’ was a more ambitious play with an oriental setting, on a subject, in Browning’s own words ‘of the most wild and passionate love’ rising to extremes of ‘self devotement and self-forgetting.’ ”

㉞ G. K. Chesterton : Browning, p. 51, II. 4—7の次の文参照

“In 1843 appeared that marvellous drama ‘The Return of the Druses’, a work which contains more of Browning’s typical qualities exhibited in an exquisite literary shape, than can easily be counted.,,

〔Ⅱ〕 参考文献

1. Charlotte Porter and Helen A, Clarke : The Return of the Druses
2. Arthur Symons : An Introduction to the Study of Browning
3. Mrs. S. Orr : Handbook to Browning's Works
4. Edward Berdoe : The Browning Cyclopadia
5. J. M. Cohen : Robert Browning
6. Edward Dowden : The Life of Robert Browning
7. G.K. Chesterton : Browning
8. Stopford A. Brook : The Poetry of Robert Browning
9. E. L. Cary : Browning